

九州（筑紫）の万葉集と風景画シリーズ（第25回）

ひ れ ぶり みね
「領布振の嶺」

～松浦佐用姫伝説と万葉集～

とほ
遠つ人 まつら さきよ ひめ つまごい
松浦佐用姫 夫恋
に 領巾 ぶりより 負へる山
の名

卷五—871 作者 不詳

（解説）

松浦佐用姫が、夫である大伴佐手彦^{さてひこ}を恋い慕って、領布を振ったということからついた山の名は。

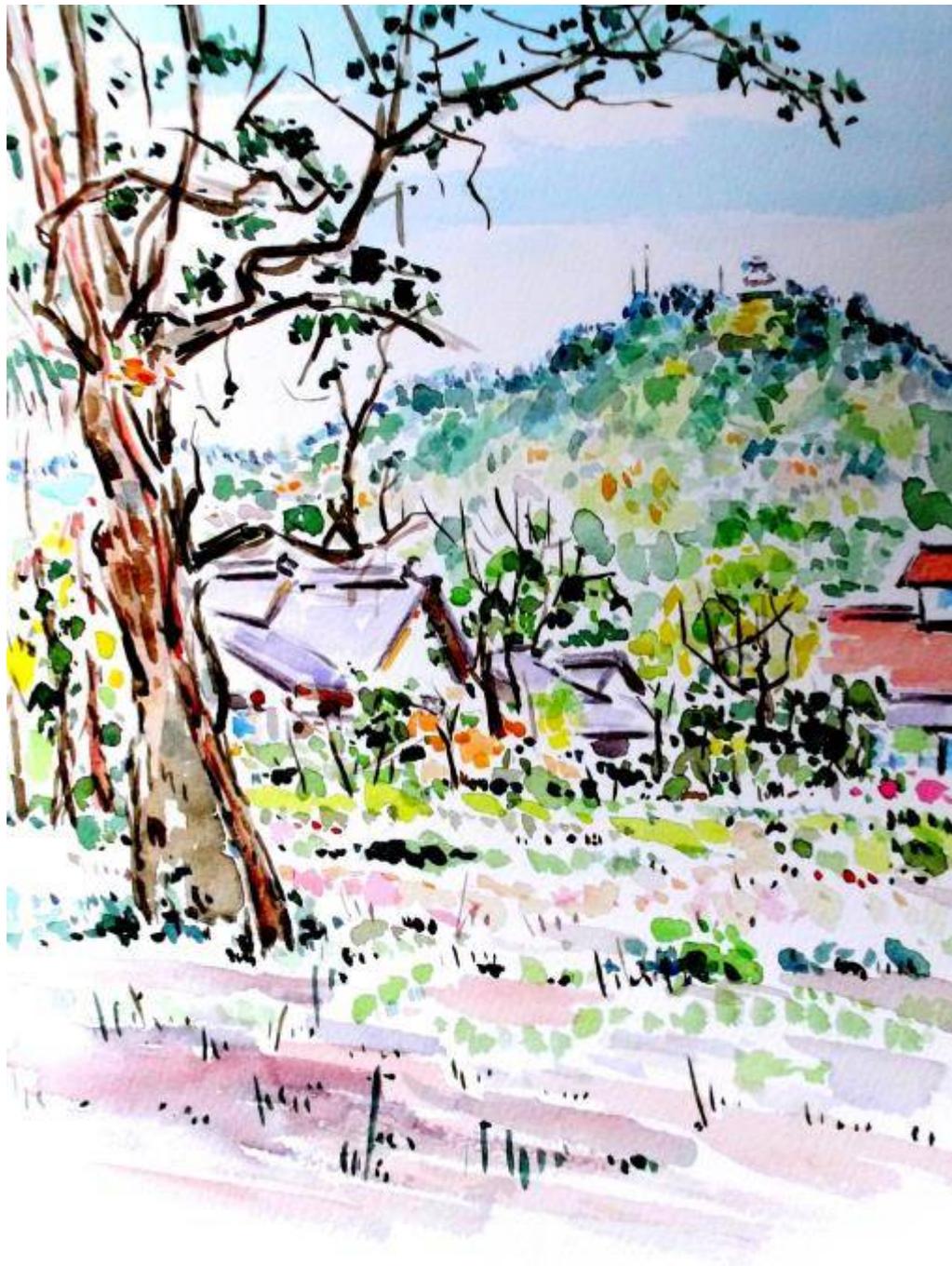
・今より 1,500 年程前の宣化二（537）年大伴佐手彦は朝廷の命をうけ、任那^{みまな}（朝鮮半島の南部にあった都市）救援のため朝鮮を目指して唐津の港を出発、洋上遥かに遠ざかって行く。妻の松浦佐用姫は別れることは容易で、また逢うことのむずかしいのを嘆いて海辺に近い山の頂で領布^{ひれ}を激しく振って別れを惜しんだ。この山を「領布振山」と呼ぶのはその故事によるものという趣旨の序文がある。

また、大伴狭手彦が任那救援に向かったことは日本書紀にも記述されている。大伴狭手彦が任那に向かって出港したと見られる唐津湾は佐賀県北西部に位置し立地上、古くから朝鮮半島や大陸との交流が盛んで遣新羅使もこの湾内に浮かぶ神集島かしわじまに船泊りしたことが万葉集に歌われている。

【写生地1 「鏡山」】

- ・唐津湾岸には国の特別名勝に指定されている「虹の松原」（唐津市東唐津）と呼ばれる美しい砂浜海岸がある。この松原の南に標高二八三・七メートルの美しい梯形ていけいの台地がある。今、唐津のシンボルの一つで唐津市のある松浦地方で古くから知られた「鏡山」（唐津市鏡と浜玉にまたがる山）であり、松浦佐用姫伝説により「領布振山」ともいうとある。虹の松原から鏡山（領布振山）を描く。（杏花）
- ・「領布」とは奈良・平安時代に用いられた女子服飾具。首にかけ、左右へ長く垂らした布帛ふはく（織物）。別れを惜しむときなどにこれを振っていたとの説がある。

「鏡山（領布振山）」



【写生地2 「唐津湾風景」】

・鏡山（領布振山ともいう。）頂上から見おろした風景は眼下に唐津市虹町などの街並とそのうしろには、天下の名勝、虹の松原（万葉時代にはなかった。）が緑の帯のように連なり、その背後には高島や万葉の狛島（神集島）などを浮かべた唐津湾の雄大な風景を眺望することができる。その風光明媚な唐津湾一帯を描く。（杏花）



○これにまつわる伝説として、このような風光の中から生まれた鏡山に「松浦佐用姫」伝説がこの地一帯に残る。

・「松浦佐用姫」伝説は「^{あま}天人の^{はごろも}羽衣」伝説、「浦島太郎」伝説と並び、日本三大伝説とか、三大悲恋物語とかと称され、古くから万葉集や多くの詩歌に詠まれた歌が残る。この伝説は、唐津市各地にその伝承地が点在している。また、伝説内容は伝説の土地、時代によって少しずつ物語の内容が変化し伝えられていると云われる。

・今、その中の一つに佐用姫が石になる「化石伝説」が唐津地方で口伝えに伝えられる一番馴染み深い話であるとしている。

・ 佐用姫が、朝鮮半島へ船出する大伴狭手彦をいとおしみ、鏡山の頂上から領布を振り名残りを惜しんだ。

山の名と 言い継^つげとかも

佐用姫が この山の上^へに

ひ れ
領布を振りけむ

(解説) 山の名と言ひ継げというわけで、佐用姫が、この山の上で
領布を振ったのであろうか。

○佐用姫は狭手彦を慕うあまり船を追って鏡山を駆け下り栗川
(現・松浦川) 川岸の岩に飛び移った場所が唐津市和多田、ここには
その時の足跡が残ると伝える佐用姫岩がある。

【写生地3 「佐用姫岩」】

佐用姫が狭手彦の乗った船を追っかけて飛び移ったと伝えられる佐
用姫岩を描く。(杏花)



○遠ざかる船をさらに追い東松浦半島最北部にある呼子の浦まで追いかけて佐用姫は、最後に加部島の天童山に登って船の影を探すが海原にはすでにその姿は見えず、佐用姫は悲しみのあまり七日七晩泣き明かし、とうとう石になってしまった。今、呼子・加部島に鎮座する田島神社境内にある末社・佐用姫神社には夫を慕ったあまり佐用姫が石になったといわれる望夫石が祀られている。

【写生地4 「佐用姫神社（田島神社）」】

佐用姫神社が境内にある田島神社の全景を対岸より描く。(杏花)



行く舟を 振り留^{とど}みかね
如何^いばかり 恋しくありけむ
松浦佐用姫

巻五 —875 作者 不詳

(解説) 去って行く舟を領巾を振って引き止めようとしても引きと
められず、どんなに恋しく思ったであろう。

『所在地』

① 「鏡山」(佐賀県唐津市鏡・虹)

JR 筑肥線「虹の松原駅」下車すると南に「鏡山」が間近にそびえる。この山の名の呼称は神功皇后が朝鮮出兵の折、戦勝を祈念して、鏡を山頂に埋めたことより起こるという。また、松浦佐用姫の伝説により「領布振山」、松浦地方の山であることから「松浦山」、さらに四方より望めば七つの形容をしめすので「七面山」とも称する。唐津地方の代表的な山である。

② 「佐用姫岩」(佐賀県唐津市和多田)

佐用姫岩は唐津の中心街から少し東に離れた松浦川沿いにある。

佐用姫が見送ったとされる鏡山からは直線距離にして約3キロの地にある。鏡山から駆け下りこの岩に飛びのり、その時につけられた足跡が岩の頂上に残されているという。

③ 「佐用姫神社」(佐賀県唐津市呼子町大字加部島)

東松浦半島の北端に位置する呼子の中心街から呼子大橋を渡ると玄界灘に囲まれた周囲約12キロでほぼ全島が台地で、海岸は一部を除き断崖である加部島がある。この加部島の東部にある漁港に面し昔、肥前国の第一の宮だったという歴史を有する古社「田島神社」が鎮座する。

・この神社の境内に松浦佐用姫が大伴狭手彦出征の後を追いこの地で石になったとされ、その化身の望夫石を祀ったという「佐用姫神社」がある。

・「加部島」にある「田島神社」へはJR筑肥線の発着駅「西唐津駅」からバスで約20分で到着する。

(参考文献) 前田 淑著「九州万葉の旅」 「佐賀県の地名・日本地名大系」、「広辞苑」、唐津市近代図書館「松浦佐用姫」など

(松浦佐用姫伝説・位置図)

